

## 生業としての土器づくり

— エチオピア西南部における土器づくりの地域間比較研究にむけて —

金子 守 恵\*

### Pottery Making by Ari Women Artisans as Their Livelihood: Towards the Comparison of Pottery Makings in Southwestern Ethiopia

KANEKO Morie\*

This paper examines the characteristics of Ari women artisans who make pottery in Southwestern Ethiopia, focusing on how they use local materials to make pots and how they ensure their livelihood by communicating with users who discriminate against artisans who produce pots.

Analyzing the production by four potters in both the rainy and dry seasons, I found that their pots always sold out in the local market, even when the number produced varied because of the weather conditions. In interviews with users and makers, aimed at evaluating pottery making, users rated durable pots positively. They reported that some pots do not last long, even those recommended by their friends. Users tend to form a special relationship, known as *jaala*, with potters who make durable pots especially for specific users. Potters tend to develop and change their unique pottery-making styles by altering their hand and finger movement patterns, in order to produce durable pots that satisfy their customers.

These findings show that Ari pottery making not only has a technological element but also involves cultural and social processes, and that these factors determine how Ari potters select the raw materials to make durable pots that will satisfy their clients. I regard their hand and finger movement patterns as useful units to analyze each potter's learning patterns and process of creating new techniques and to compare with potter's technological variations among the several ethnic groups of Southwestern Ethiopia.

## はじめに

エチオピア南部には、土器や鉄製品などをつくり、それを農民に販売したり農作物と交換したりすることによって生活を営んでいる人びとがいる。女性職人は土器づくりに従事し、男性

---

\* 日本学術振興会特別研究員, Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science  
2006 年 7 月 31 日受付, 2006 年 11 月 7 日受理

職人は鉄製品づくりをおこなうことが多い。エチオピア西南部に暮らすアリの人びとのなかにも、土器をつくりそれを農民に販売することで生計をなしている女性職人がいる。

この論文では、女性職人が土器をつくりそれを利用者に渡すまでのプロセスすべてを「生業としての土器づくり」ととらえる。季節的な条件、世帯の生計状況、利用者による技術の評価、つくり手と売り手の社会的な関係、そして土器づくりの手順や身体動作などを検討することによって「生業としての土器づくり」の特質をあきらかにしていく。さらに、ここでとりあげた特質が、今後土器づくりを異なる地域間で比較する際の手がかりとする可能性についても検討する。

## 1. 目的と方法

### 1.1 先行研究

アフリカにおける土器づくりに関する研究では、大別して 2 つの論点が検討されてきた。ひとつは、土器をつくる職人の文化的な役割や土器を介した社会的関係を中心に論じる研究（ものをつくる人の研究）であり [たとえば Herbert 1993; Freeman and Pankhurst 2001]、もうひとつは、土器づくりの技術的な側面を中心に論じる研究（ものづくり方の研究）である [たとえば 森 1974, 1987a, 1987b, 1987c, 1990, 1992; Gosselain 1999, 2000; Livingstone 2000].

エチオピア南部の土器づくりをはじめとする「ものづくり」を対象にした研究は、「ものをつくる人の研究」を中心に展開されてきた。たとえば、歴史学者のパンクラストは、エチオピア南部でものづくりを生業とする人びとが 19 世紀後半に拡大してきた北部アムハラ人の宗教や生活との関わりの中で、文化的・社会的周辺性を付与されてきたことを指摘している [Pankhurst 2001: 5-6]。職能集団がもつ豊穡性のイメージ、政治的な力や他の特別な力（たとえば、呪いの力や汚れを清浄化する力）などの差異も論じられてきた [Freeman and Pankhurst 2001].

Behailu and Data [2001: 122] は、農民集団からはひとつのまとまりとしてとらえられていても、職能集団内部には、出自、夫の職業、職能集団内での名称のちがいなどによって区別されるような多様性が内包されていることを指摘している。しかし、そのような差異が、彼ら・彼女らの周辺化や生計活動にあたる影響には言及していない。

他方「ものづくり方の研究」においては、土器づくりの技術的な特徴を中心にしながら、その技法がいかなる背景によって成立しているのかが探究されてきた。<sup>1)</sup> Gosselain [1999, 2000] は、現地調査と文献をもとに、サブサハラ以南の 102 の社会における土器づくり技法の地理的分布を検討し、土器づくりにまつわる禁忌や儀礼について比較した結果、人びとが特定の技法を彼らの世界観に結びつけて選択していることを見だし、土器づくりの技法

が、自然環境条件への機能的適応としてだけではなく、土器にまつわる社会的観念の領域においても適応的であると指摘した。

「ものをつくる人」と「ものづくり方」の研究には、集団を共通の特性をもったまとまりとして分析・検討する傾向がある。このようなアプローチは、職能集団が全体としてもつ社会的、文化的な特徴や、地域や集団に共通な技法の特質をえがきだすのには有効と考えられるが、つくり手が土器を介して利用者と社会的な関わりをもちながら土器づくりを変化させ、創造していくという個々のつくり手に注目した土器づくりの動態的な側面を検討するには適していない。

## 1.2 目的と方法

この論文では、アリの女性職人が素材と関わりながら土器をつくる行為だけではなく、利用者と土器をやりとりするところまでのすべてのプロセスを「生業としての土器づくり」ととらえる。季節的な変化のなかで、職人が夫や親族とともに生活しながら土器をつくり、その土器を介して客とものをやりとりする彼女たちの行為や社会的な関係にも注目して、エチオピア西南部の他地域における「生業としての土器づくり」を比較するうえでの視点や要素に関して検討する。

論文は 4 節構成になっている。2 節では、アリの人びとにとって主要な作物のひとつであるエンセーテを基盤とした農耕活動と土器の利用、地域内における土器の供給個数と需要個数、そして土器のつくり方について述べる。3 節では、土器の販売収入の使い方など生計活動の実態把握をおこなう。また、土器をやりとりすることによってむすばれる利用者との盟友関係的な関わりや土器づくりの評価の仕方についても記述し、社会・文化的な行為としての土器づくりの様相をえがきだす。最終節では、生業としての土器づくりの特徴についてまとめ、そのうえでエチオピア西南部における土器づくりの地域間比較のための視点や要素について考察する。

この論文のもとになるデータは、1998 年 11 月から 2002 年 3 月までの雨季と乾季の約 1 ヶ月間 4 名の職人が成形した土器の生産量の記録、8 ヶ所の定期市での土器のやりとりの様子や利用者による土器の評価の仕方の聞き取り、そして約 60 名の職人の身体動作に注目して観察した土器のつくり方の記録である。

---

1) 人類学におけるものづくり方の研究は、技術に対する 2 つの見解のはさまにあって十分に進展してこなかった [Ingold 1997: 106-107]。そのひとつの立場である進化論的な見方では、技術は人間の適応手段と位置づけられ複雑であればあるほど社会が発展しているととらえられる [Wendell 1976]。もう一方の相対主義的な見方では、技術が単純であっても社会様式が複雑な社会があること、またその逆の特徴がみられる社会も存在することを指摘し、進化論的な見方で技術をとらえることを否定した [Boas 1982: 267]。これに加えてアメリカでは、1920 年代から 30 年代にさかんであった物質文化研究が、40 年代からさかんになってきた親族組織や社会組織の研究へと変化していった経緯がある [祖父江ほか 1976]。

## 2. 調査地概要

### 2.1 農耕活動と土器の利用

アリの人びとが暮らす地域は、エチオピアの首都アジスアベバから西南方向に 700 キロメートルに位置する（図 1）。自らをアリと称する人びとは推定 10 万～20 万人おり、<sup>2)</sup> 彼らは標高 1,000～3,000 メートルの起伏にとんだ地域に暮らしている。彼らは、自分たちが生活している地域を高地（ディジ *dizi*、標高約 1,600 メートル以上）と低地（ダウラ *dawla*、標高約 1,600 メートル未満）に区分しており、<sup>3)</sup> 高度差にあわせて作物を栽培しわけている。

1 年は乾季と雨季にわかれており、乾季 (*haashin*) は 10 月から 3 月ころまで、雨季 (*bergi*) は 4 月から 9 月くらいまで続く。気温は、年間をとおして摂氏 10 度から 30 度のあいだを推移している（1999 年標高 1,600 メートル前後の M 村、S 村における計測）。年平均降水量は、アリ地域内の南端に位置するジンカ（標高約 1,400 メートル）において 1,000 ミリメートル前後である〔重田 1988〕。

アリの人びとは、定住的な農耕活動をおこなって日々の暮らしを営んでいる。彼らは 2 種

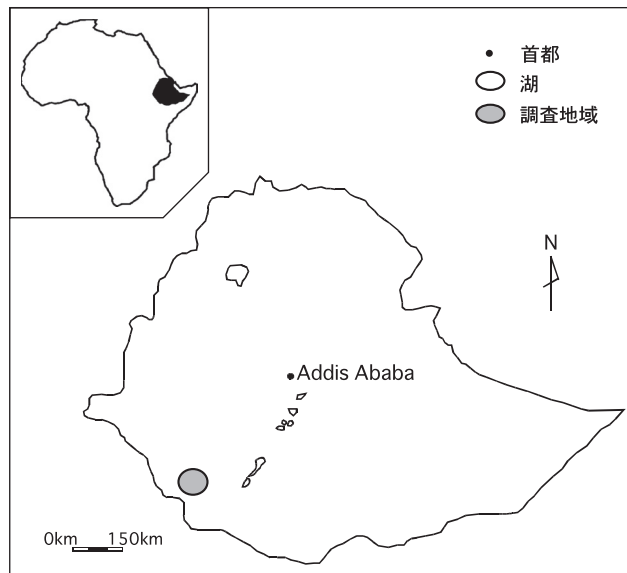






図 1 調査地域

- 2) 自らをアリと称する人びとは 1991 年のセンサスで約 11 万人〔Gebre 1995〕といわれているが、2006 年現在においてその数は 1.5～2 倍に増加していると推測できる。
- 3) 重田〔1988: 199〕は、この環境カテゴリーは多分に相対的であることわりながら 1,600 メートルを目安に移行帯を介して二分されていると述べている。

類の畑を使いわけている。ティカハーミ (*tika haami*) とよばれる庭畑では、おもにエンセーテ,<sup>4)</sup> ヤム, タロなどのイモ類やコーヒーのほかにケールやインゲンマメなどを栽培し, ウォニハーミ (*wony haami*) とよばれる畑では, トウモロコシ, オオムギ, コムギ, エチオピア起源のイネ科穀類のテフや, ササゲやエンドウなどの作物を栽培している。アリの人びとはこの 2 種類の畑を利用しながら 1 年を通じてとぎれることなく食糧を手に入れており, 自給的な生業活動を営んでいる。

土器は, アリの人びとが食生活を営むうえで欠かせることができない。彼らは, 60 種類以上の土器を利用しており, そのうち約 50 種類の土器を (1) ティラ (*tila*),<sup>5)</sup> (2) アクシャ (*aksh*), (3) ディスティ (*disti*), (4) ジャバナ (*jebena*) (表 1) の 4 つの総称名をもちいて分類していた。<sup>6)</sup> 約 130 世帯を対象にした土器利用の調査によれば, アリの世帯は平均して 12 個の土器を所有している [金子 2004]。既婚女性たちは, 同じ形態であっても用途に応じてさらに細かく分類・命名していた。たとえば, 彼女たちはティラの形態をした土器について 16 種類の下位分類とその方名を回答した。<sup>7)</sup>

表 1 アリの世帯で所有されている主な土器の形態

器種名	機能	言語	形態
ティラ ( <i>tila</i> )	イモ類を蒸かす・煮る 水の運搬・保存	アリ語	
アクシャ ( <i>aksh</i> )	穀類を煎る・パンを焼く	アリ語	
ディスティ ( <i>disti</i> )	副食を煮込む	アムハラ語由来	
ジャバナ ( <i>jebena</i> )	コーヒー豆を煮出す	アムハラ語	

4) バショウ科 (学名: *Ensete ventricosum*) に属し, 姿形がバナナに似ていることから偽バナナともよばれる。バナナは標高およそ 1,500 メートル以下のところで生育するが, エンセーテは標高およそ 3,000 メートルの寒い地域においても生育する。概算によれば, 一本のエンセーテで家族 4 人が 1 ヶ月暮らすことができ, 高い人口支持力があるといわれている。エンセーテの植物学的な特徴や利用, 農業システムなどについては重田 [1988] や Brandt *et al.* [1997] が詳しい。

5) 単独でもちいられる場合はティラ (*tila*) と発音されていたが, 複合語としてもちいられるときはティル (*til*) と発音されていた。

6) 約 10 種類は, 屋根飾り, 移動式カマド, コップ, 笛など 4 つの分類とは異なる形をしたものである。

7) たとえば, ブンティル (*bun-til*) は, アリ語でコーヒーを意味するブン (*bun*) という単語とティラ (*tila*) という単語の複合語であり, この土器はコーヒーの葉をわかすときに利用する。彼女たちは, 1 次語彙としてまず食材名や料理名をつけ, そのあとに 2 次語彙としてティル (*til*) という名前をつけてそれらをよんでいた。このような方名の付け方は, ティラだけに限らず, ティラとは異なる形態をしているアクシャやディスティについても同様であった。

## 2.2 土器をつくる人びとと土器づくり

アリの人びとは、カンツァ (*kantsa*) とマナ (*mana*) とよばれる 2 つの社会集団のどちらかに属している。カンツァの人びとはおもに農耕活動をおこなって日々の生活を営んでいる一方、マナの人びとは、おもに土器、鉄製品、そして木工品などを専門に製作している。<sup>8)</sup> カンツァの人びとはマナの人びとと婚姻関係をもつことや食事をともにとることをタブー視している。マナに属する人びとは、ガシマナ、ティラ・マナ (土器づくりの職能集団)、ファカ・マナ (鍛冶職人の集団) のいずれかの下位集団に属している。マナのなかには、階層的な関係がある。ガシマナは、ティラ・マナやファカ・マナと婚姻関係をむすぶことや共食することを、ティラ・マナはファカ・マナと婚姻関係をむすぶことや共食することをタブー視している。

土器づくりの職能集団ティラ・マナは内婚の単位であり、この集団にうまれた女性だけが土器をつくる。アリの人びとが暮らす地域内では、約 350 名の女性職人を確認できた (以下、土器づくりの女性職人を「職人」と表記する)。ティラ・マナの男性は粘土の採取や燃料の収集などをすることはあるが、粘土にさわって形をつくる作業 (ミシカン *mishikan*, アリ語で「土器を」つくる) の意) は女性だけがおこなえることだと答え、従事するものはほとんどいなかった。

職人が 1 年を通じて土器を成形しているのに対し、夫は畑の耕作など農作業にたずさわっている。彼らは 1~10 トマッド (*timad*) (8~10 トマッド=1ha [Gebre 1995: 44]) の畑を耕作している<sup>9)</sup>(表 2)。農民の耕作面積 (穀物の畑) の平均 11 トマッド [Gebre 1995] と比較して彼らの耕地面積は少ない。職人の夫は、年に 2 度穀物の収穫があるほかに、1~2 年に 1 度コーヒーの収穫もあるが、それだけで世帯の生活を支えるには足りない。

アリの地域内には、土器づくりの職人とその親族が集住している 12 の村を確認できている。彼らは、粘土採取場所から近いところに集住している。1 つの村はティラ・マナの父系の親族集団の成員とほかの村から嫁にきた女性職人で構成されている場合が多い。この集団にうまれた子供は父親のクラン名を継承する。ティラ・マナ内では、クランが外婚の単位となっており、娘は結婚を契機に他村へ移住することが多い。

職人は、粘土採取を夫もしくはほかの職人と一緒におこなう。採取場所の条件にもよるが、1~2 メートルの深さにまで土を掘り出し、底にたまった水をかき出してから、ナイフをつかっ

8) 1970 年代までは、アリの社会集団に関する禁忌・清祓、葬送儀礼等が頻繁におこなわれていた [松園 1975, 1979] が、その後、1960 年代からこの地域に入ってきたプロテスタントの布教者が、社会集団間の文化的、社会的な差異をなくすような活動を展開している。たとえば、教会活動の一貫として農民と職人による協同労働 [鈴木 2004] や食事を共にとるなどの活動を積極的におこなっている。農民も土器職人も高い割合でプロテスタントに入信しており、伝統的な方法で葬送儀礼などをおこなう者が少なくなっている。

9) 聞き取りによれば、社会主義政権にかわってから (1974 年以降)、ティラ・マナの男性は農地の利用が可能になった。

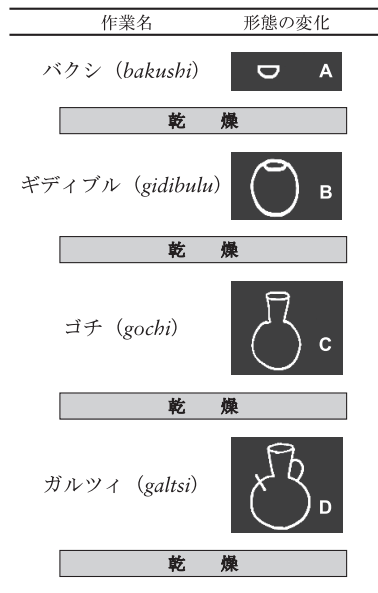
表 2 職人の夫が耕作する畑面積と家畜数

	耕作地 (トマッド*)	コーヒー (100kg/袋)	家畜/他 (ブル=約 13 円)
[G 村]			
I. S. 夫 (60 歳代)	3	2	経産ウシ 1
A. A. 夫 (50 歳代)	10 (うち半分は借地)	3	未去勢ウシ 3 経産ウシ 3 仔ウシ 1, ヤギ 4
B. G. 夫 (60 歳代)	8	n.d.	大工仕事不定期 (50 ブル/回～ 200 ブル/回)
D. G. 夫 (20 歳代)	3 (うち半分は借地)	なし	なし
[S 村]			
A. M. 夫 (30 歳代)	1 (借地)	1 未満	加工品不定期販売 (約 1 ブル/回)
A. I. 夫 (60 歳代)	10	3～4	未去勢ウシ 2
D. S. 夫 (30 歳代)	4	3～4	なし
A. B. 夫 (30 歳代)	1	1 未満	未去勢ウシ 1 経産ヒツジ 1 オスヒツジ 2

\*トマッド *timad*=約10a. Gebre[1995: 44] によれば 8～10 トマッド=約 1ha.  
(2001 年 3 月～6 月聞き取り調査より作成)

て切り取るように粘土を採取していることが多い。職人は、採取した粘土を石でたたいて不純物をとりのぞき、砂や土器片を砕いたものを混ぜ合わせ、1～2 時間かけて粘土の準備をする。職人は、準備した粘土をつかって一度に形をつくるのではなく、乾燥させながら少しずつ粘土を付け足したり、表面に粘土を塗りつけたりして土器を完成させる。たとえば、最も頻繁に利用されているティラは、球形の底から成形をはじめその上に粘土をつけて上部をつくりたしていく。職人は成形過程を 4 つの成形段階に分類しており (図 2)、これに基づいて互いの作業状況を説明する。

土器を成形する際に、職人同士が同じ作業場所に集まることはなく、火入れも職人ごとにおこなう。母と娘だけが同じ作業場で土器をつくり、同じ火入れ場所で土器を焼成する。ティラ・マナとしてうまれた娘は、6 歳をすぎるところになると母親と同じ作業場所で土器を本格的につくりはじめるようになる。娘は母親のもとでさまざまな種類の土器づくりをまなび、15 歳をすぎるところには結婚して夫の家に移住し、定期市で自分の土器を利用者に直接販売して世帯の家計を担うようになる。

図 2 形の変化に着目した土器 (*tila*) の成形段階

### 2.3 地域内で流通するアリの土器

アリの人びとは、およそ 60 種類もの土器をつかいはけており、1 世帯につき平均して 12 個の土器を所有している。そのほとんどがティラ・マナの職人によってつくられ、地域内で週に 2 回開催される定期市に出荷される。篠原 [1996] は、エチオピア南部の標高約 1,800 メートルの地域に暮らすコンソの人びとが生産する土器の需要と供給の関係を検討した。その結果、土器職人が集住するサウガメ村では年間生産量が地域内の需要量の 20 倍近くあり、地域外にも彼らが製作した土器が流通していることを述べている。

筆者が現地調査や周辺の広域調査において散見する限り、アリの土器は、コンソの土器流通とは異なり、地域内だけで流通している可能性が高い。地域外からの流入もほとんどない。2001 年から 2002 年のあいだに 4 人の職人が 15 日間のうちに生産した個数は、乾季の場合 10 個～33 個、雨季の場合 8 個～21 個であった (表 3)。これをモデルとして、乾季と雨季をそれぞれ半年ずつにして計算すると、乾季 4 万 5,000 千個～15 万個、雨季 3 万 6,000 個～9 万 6,000 個、年間 8 万 1,000 個～24 万 6,000 個の土器が生産されていると推定できる。

一方、アリ地域内での土器の需要個数についての概算は次のようになる。アリの総人口を低めに見積もって約 10 万人、1 世帯あたりの世帯員数を 4 人～10 人と仮定すると、アリの総世帯数は 1 万～2.5 万世帯となる。1 世帯あたりの所有個数の平均 12 個で計算すると、アリの総世帯では 12 万個～30 万個の土器が所有されていることになる。アリの各世帯が所有し



表 3 4人の職人による土器生産個数

職人	雨季		乾季	
	5月10日～5月24日		12月21日～1月4日	
D. G.(20代)	21		33	
M. D.(60代)	8		21	
I. S.(50代)	8		10	
A. A.(40代)	12		18	

(2001年調べ)

ている土器は、水瓶をのぞいてほとんどが調理用具として日常的に火にかけてもちいられている。こうした土器には、1～3年の耐久性があるといわれていた。ゆえに、アリ全体で少なくとも年間4万～30万個の土器の需要があると考えることができる。年間需要個数とさきほど算出した土器生産個数を照らし合わせると、女性職人がつくる土器は、地域内の需要のみをまかなっていると考えることができる。

実際には、季節的な変化と作業の進行状況、価格の変動、利用者の経済状況といったさまざまな要素がからみあい、定期市のたびに土器の供給個数と需要個数は変化すると考えられる。では実際に女性職人は、これらの諸要素にいかにして対応しながら土器をつくってそれを販売し、世帯の家計を担っているのだろうか？

### 3. 世帯の家計を担う土器づくり

#### 3.1 定期市における土器の販売収入と支出

2006年3月現在、アリ地域内には低地（ダウラ）と高地（ディジ）の境界域にあたる1,600メートル付近に10以上の市場がある。アリの定期市は、高地と低地の農産物を交換する場としてだけでなく、高地や低地の人びとの社交と出会いの場としての機能も担っている〔重田2004〕。人びとは、家にある農産物や工芸品を市場にもちこみ、家路につくときには市場で交換したり購入したものをもちかえる。M定期市の場合、工業製品や衣料品などは仲買人が販売しているが、土器などの工芸品販売に仲買人が介在することはほとんどなく、職人が直接販売している。

土器職人は、村から歩いて1～3時間のところにある定期市に自分たちで土器を運び、利用者に直接販売する。職人たちは、出荷日や成形する土器の種類などを調整することはなく、各自の作業状況に応じて土器を出荷している。1998年11月から2001年1月までに、M定期市に出荷した職人の数と土器の個数を記録したところ、ときには職人が1人も土器を出荷しないときもあれば、村の職人の8割以上が出荷することもあり、定期市における職人の数や土器の個数は変動が大きいことがあきらかになった（図3）。

また、各職人が成形・出荷する土器の種類に差異があることもあきらかになった。たとえ

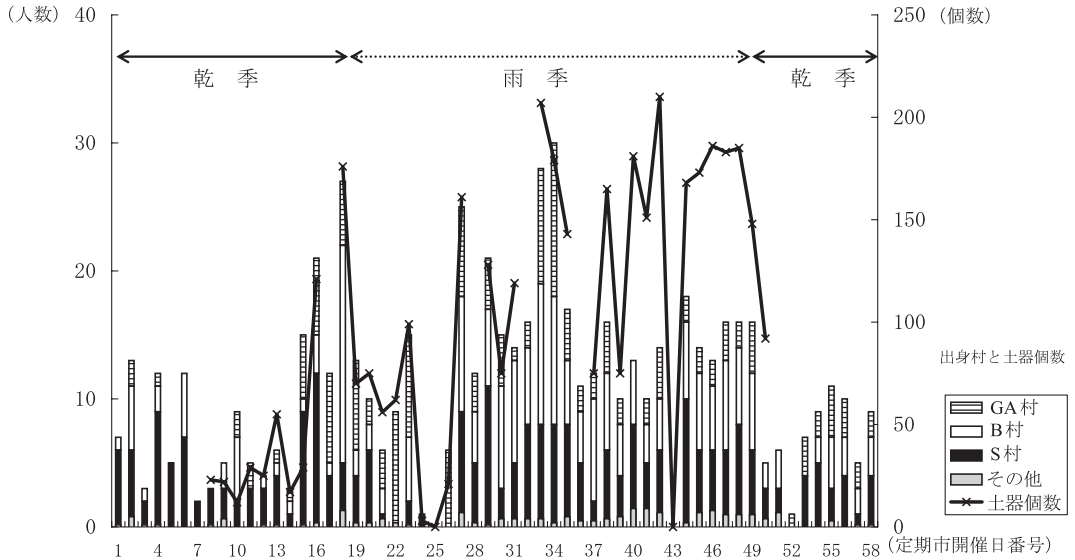


図3 M 定期市に土器をもってきた職人数および定期市で販売されていた土器の個数

1998年11月23日～2002年1月24日までの間に開催された定期市のうち58回分を調査。毎回12:00～13:30に調査。S村はM定期市まで徒歩片道約1時間、B村・GA村はM定期市まで徒歩片道約3時間。

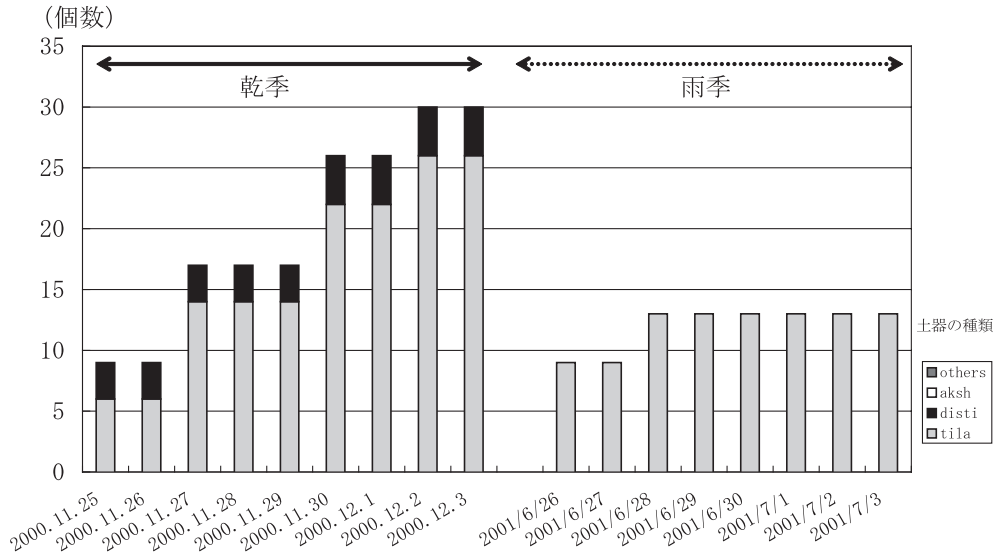


図4 職人 A.M. の製作した土器の種類と個数

ば、S村に暮らす A.M. の場合、観察期間中、M 定期市に少なくとも 2 週間に 1 度は土器を出荷しており、雨季と乾季を通じてティラとディスティの形態をした土器をつくる傾向があった (図 4)。調査をおこなったほかの職人のなかには、ティラとディスティの形態を中心

に成形するもの、ティラとアクシャの形態を中心に成形するものなどがおり [金子 2005b: 207-218], 複数の形態の土器を成形して出荷する傾向があるといえる。職人 I. S. によれば、複数の形態の土器を成形することの積極的な理由として、毎回さまざまな形の土器をつくれば仮に成形や焼成に失敗しても亀裂や破裂しない土器があるということ、またさまざまな種類の土器があれば、定期市で必ずだれかがどれかひとつを購入し、その収入で塩だけでも買うことができる」と説明する。

土器の販売収入は、おもに食費や頼母子講などの掛け金として使われる。A. M. の場合、12月4日に小型のティラを中心に17個の土器を出荷し22ブル(約300円, 1ブル=約13円)の販売収入を得た。その後彼女は、穀類やイモ類、香辛料などの食糧を約7ブル購入し、帰りに近くの酒場でハチミツ酒を2本(6ブル)飲んでかえった。その後、肉屋によって借金をかえし(5ブル)、家に帰ると夫に協同労働組織の掛け金(2ブル)と酒代(1ブル)を要求され、販売収入はその日のうちにほとんどなくなってしまった。<sup>10)</sup>

定期市では、野菜類やイモ類などの農産物の販売単位や価格が決まっているのに対し、土器や鉄製品などの加工品や家畜などの価格は売り手と買い手の交渉によって決定する。土器の価格は大きさに比例する。同じかたちの土器では、小さなものは50セントから1ブルであるのに対して、大きなものは30ブル(約400円)以上する。<sup>11)</sup> 土器に装飾があっても値段には反映されない。また円盤型をしたアクシャは、ティラやディスティよりも高値がつく。定期市での調査によれば、アクシャの形態ばかり成形する職人は出荷数が少なく、ティラの形態を中心に成形する職人は出荷数がアクシャとくらべて多い傾向がある(表4)。

表4 4名の職人が10日間に成形した土器個数

職人	ティラ	ディスティ	アクシャ	その他	合計(個)	販売収入
D. G. (10代)	9	6	0	0	15	約27ブル
M. D. (60代)	2	3	2	2	9	約21ブル
I. S. (50代)	2	2	3	0	7	約21ブル
A. A. (40代)	0	0	7	1	8	約24ブル

職人 A. A. の場合アクシャは大きさに応じて2~3ブル、その他の土器は7ブル、M. D. の場合アクシャは A. A. と同様に、ティラ、ディスティ、その他の土器は3ブル、D. G. の場合ティラとディスティは1.5~2ブルで計算した(1ブル=約13円, 2001年6月9日~18日調べ)。

10) 粘土採取場の持ち主との関わりによるが、多くの村では年に1度粘土代を支払う程度で燃料代などほかの経費はほとんどなく、彼女らは販売収入のほとんどを生活費などにあてることができる。

11) 同じ定期市で販売されている直径約10センチメートルのアルミ製鍋が約10ブルであった。

### 3.2 土器をやりとりする

定期市では、毎回一定数の土器が購入されているわけではない。定期市が開催されてからもっとも人で賑わう正午をすぎても 200 個以上の土器が売れ残っている場合もあれば、土器が 20 個以下しか残っていないような時もある。また、乾季と比較すると雨季に土器が売れ残っている割合が高い。

これまでの定期市を観察した限りでは、雨季に販売される土器は乾季の土器の価格と比較して常に 3 割から 5 割ほど安価であった。職人と農民のどちらも、雨季に価格が低くなるのは、換金作物（コーヒー）が収穫できずどの世帯にも手持ちの現金がなくて人びとがものを購入しないからだと説明する。需要・供給量と価格変動についてはさらなる検討が必要と考えられる。<sup>12)</sup> ここでは職人による土器の販売方法と、土器の製作・販売活動をめぐって職人が利用者とのあいだにむすぶ社会的な関係に注目して検討していく。

アリの人びとは、丈夫で長持ちする土器を肯定的に評価する。彼らによれば、丈夫な土器を購入するときには粘土の産地と同様に土器をつくる職人の技術を判断の要素にしている。人びとは、一度自分で使ってみて丈夫で長持ちした土器をつくる職人から購入しようとする。利用者は丈夫な土器をつくる職人を「彼女の「手」は「よい」：アーニ コット ワンナ *aani kot wanna*」<sup>13)</sup> と表現する。女性職人たちも、利用者がつくり手に注目して土器を手に入れようとしていることを強く意識している。

「事例：A. M. が客に土器を販売するに至る経緯」

12 月 4 日の定期市で A. M. の土器を見に来た客のなかに、以前彼女の土器を購入したものがいた。その客は、3 年たった今も A. M. の土器を使っていること、その土器が軽くて丈夫であることを他の客にむかって話していた。そばで聞いていた若い娘は、A. M. の土器を 1.5 ブルで買おうとし、何度もお金を A. M. の手に渡そうとした。しかし A. M. は、値段は 2.5 ブルだ、と言い続けてお金を受け取らなかった。娘はあきらめてその場をさった。その日は午後 3 時をすぎても A. M. の土器は完売せず、彼女と筆者は売れ残った土器をもって酒屋に入った。ハチミツ酒を 1 本たのんで飲みはじめると、店の客は私たちがもってきた土器の値段を聞きはじめた。そこへさきほどの若い娘が酒屋の前をとおりました。娘は私たちと私たちの足下においてある土器に気がつき、連れの女性と言葉をかわしてから酒屋に

12) イモ類、エンセーテの加工品、穀類、野菜類などの農産物、家畜、土器などの価格変動については、季節的な変化と生産量、換金作物の価格動向などをふまえながら、今後より定量的に検討していく必要がある。

13) アーニとはアリ語で、直訳すると「手」という意味になり調査中に 7 つの用例を確認した [金子 2005b: 161]。ワンナもアリ語で、さまざまな場面でもちいられる多義的な表現だが、ここでは肯定的な評価を意味する「よい」という訳語をあてておく。

入ってきた。そして、A. M. の前に来てもう 1 度みせてくれと頼んだ。A. M. は彼女に土器を渡した。彼女は 1メートルほど距離をおいて A. M. の右隣に座り、土器の底や内側を吟味しはじめた。連れの女性も酒屋に入ってきた。数分後、娘は座ったまま A. M. にお金を手渡し、A. M. は 2.5 プルあることを確認すると、受け取った 50 セント硬貨で土器表面を軽くたたいて娘に渡した (2001 年 12 月 4 日, M 村の定期市での観察)。

この事例は、職人と利用者との土器をめぐるやりとりの一側面をよくあらわしている。客は、「丈夫な」土器であると知れば、ほかの土器の値段より高くても購入しようとする。一方職人は、定期市で土器の売れ行きが悪くても決して値段をさげようとしなない。土器の値段を簡単にさげて客に買ったたかれてしまった若い職人に対して、ほかの職人が「あの娘は土器の売り方を知らない」と揶揄することもある。上記の事例では交渉は成立したが、職人が値段をさげないことに客が怒り、口げんかがはじまって交渉が決裂することもめずらしくない。

丈夫な土器をつくる「手」の「よい」職人は、必ずしもすべての利用者にとって丈夫な土器をつくることができるわけではない。利用者のなかには、ほかの人にとっては長持ちする土器をつくる職人であっても、自分が使うとその人の土器は長持ちしないと評価する人もいる。<sup>14)</sup> アリの人びとは、何度も土器を購入し使用する過程で、丈夫な土器をつくる職人がわかってくると、その職人から好んで土器を手にいれようとする傾向がある。利用者も職人が土器を介したやりとりの過程で互いに信頼しあうようになると、職人が土器の注文をうけたときに前金として少額を受け取ったり、利用者が土器を受け取った後で支払いをすることもある。そして、彼女たちは盟友的な関係性をあらわすジャアラ (*jaala*)<sup>15)</sup> という表現で互いをよぶようになる。職人は土器が売れないときに、彼女のジャアラである客からお金や食べ物を譲り受けることもあれば、逆に、職人から土器をプレゼントすることもある。ジャアラになった客は職人に対して自分の使い勝手にあわせた土器を注文してすぐにつくってもらうこともできる。

### 3.3 土器づくりの独自性

職人は自分自身やほかの職人の土器づくりを評価するときに、「彼女の「手」は「ちがう」：アーニ コット ガラ (*ani kot gara*)」と表現する。この表現は、同じ種類の土器であって

14) 土器職人が集住する村に暮らしている K は、2001 年 1 月 16 日の時点で 19 個の土器を所有していた。彼女はその村の多くの職人から土器を購入したり贈与されたりしていて、土器を製作した職人の名前や入手した経緯も詳細に記憶していた。しかし彼女によれば、職人がつくる土器のなかには、ほかの人にはよいかもしれないが自分が使うとすぐに壊れてしまうものがあると説明した。

15) ジャアラ関係は、土器づくりの職人とその客とのあいだにかぎらず、アリのなかでも社会集団が異なる人たちのあいだや、同じ社会集団に属していても遠方に暮らしているもの同士がむすぶ場合もある。またエチオピア西南部ではものや情報のやりとりが、民族集団をこえたジャアラ関係を介しておこなわれていることが知られている [Gebre 1995]。

もほかの職人のつくり方とちがうとき、たとえば成形の手順や焼成方法のちがいを強調するときにもちいられることが多い [金子 2005a].

職人は、結婚など社会的な立場の変化を契機にして自分の成形手順や焼成方法を確立していく場合がある。2001年に結婚した職人 D. G. は、結婚を契機にこれまで暮らしていた B 村から夫の暮らす G 村に移住してきた。夫は、家畜や換金作物を栽培する畑ももたないため (表 2)、彼女の販売収入が世帯の家計を担っている。B 村の職人のあいだでは、彼女は大型の土器を数多く成形し、土器づくりに習熟していたと噂されていた。しかし G 村に移住して以来、成形途中や焼成時に土器に亀裂がはいったり破裂したりしてしまうことがしばしばあった。

その状態を姑や周囲の職人は「まだ彼女は粘土をしらない」と表現したうえで、姑が頻りに D. G. の作業場に行って、砂を混練する割合、土器の乾燥のさせ方、成形途中の土器の移動のさせ方、亀裂がはいってしまったときにはそれを修正する方法、燃料の量、焼成の仕方などをおしえていた。それでも彼女の土器は壊れてしまうことが多かった。結婚後 3~4 ヶ月たっても彼女のつくった土器は壊れ続けた。周囲の人びとのなかには、D. G. の夫が未払い分の婚資を父親に支払わないから、父親が彼女を心配しそのために土器が壊れてしまうのだと噂するものもいた。

D. G. は、粘土の選択、土器を成形する手順、つくる土器の種類などを変化させ試行錯誤をかさねていった。たとえば、G 村の職人たちが使いわけている 2 種類の粘土のうち、<sup>16)</sup> 焼き上がりが赤くなる粘土をもちいず、他の職人が最初の形をつくるときにもちいる粘土だけで土器をつくってみたり、土器の底の内側に粘土を塗る作業を取り入れたり、土器の上部表面に粘土を塗るときに取っ手をつけるなど、これまで彼女がおこなってきたつくり方とは異なる成形手順で土器づくりを試みていた。

職人は、自分のつくり方の独自性を主張するとき、成形手順について言及することがある。D. G. を含め土器づくりを観察した約 60 人の職人は、特有の手指の動かし方<sup>17)</sup> で土器をつくっている。この手指の動かし方は、調査者である筆者が分類して記述したものだが、職人たちはこれらの手指の動かし方のまとまりに動作名 (たとえば「塗る」「伸ばす」など) をつけて識別している。動作名に注目した成形過程の分析によれば、たとえ母親から土器づくりを学んだ娘でも、母の成形手順とは異なる順で土器をつくっている [金子 2005b].

16) 1 つはトーニンダ (toninda) とよばれ、焼成すると色が赤くなる。G 村の職人は土器の表面に粘土を塗るときにもちいる。2 つめはキンナ (kinna) とよばれ、土器の基本的な形をつくるときにもちいられている。職人によれば、キンナは焼成中破裂することが少ないという特徴がある。

17) 筆者は (1) 使用する指、(2) 指の動き、という 2 つの基準で設定した分析単位で職人らの成形過程を区分し、その配列を分析した。職人は、土器づくりにかかわる手指の使い方を (1) (2) の基準で分類したり特定の用語を命名しているわけではない。手指の動かし方などの分析単位や分析方法については別稿に詳しくまとめた [金子 2005b].

D. G. の土器づくりに関する試行錯誤は、B 村にいて母親の土器づくりをみようみまねで学び、その後さまざまな種類の土器を習得していく過程で確立してきた成形手順を変化させることであった。G 村に移住してからの D. G. は、前述したような試行錯誤を繰り返した他に、大きな土器をつくることを避け、比較的壊れる割合が低く市でもすぐに売り切れる傾向がある小さい土器ばかりをつくるようになり、毎回 20 ブル程度の販売収入を得られるようになっていった。

## 4. 考 察

### 4.1 生業としての土器づくりの特徴

職人は、1 年を通じて地域内で入手できる粘土や燃料をもちいて土器をつくり、定期市で利用者に土器を直接販売し生計をなしたたせている。この論文では、土器をつくることと販売することをそれぞれ独立した行為としてとらえるのではなく、生業活動を営むうえで相互に関連したひとつづきの行為と位置づけ、生業としての土器づくりの特徴について検討してきた。

職人が 1 年間につくる土器の数は、計算上は需要個数に対応している。しかし、定期市のたびに供給個数と需要個数は一定ではない。気温や雨量などの天候条件に影響をうけて供給個数が変化するうえに、乾季と雨季では土器の価格にも差異がみられる。また、利用者の経済的な状況も乾季と雨季では異なっている。このような状況において職人は、土器を介して形成してきた社会的な関わりを利用して生活をなしたたせている。

農民と職人の社会的な関係は、利用者の土器に対する評価の仕方に影響を受けながら成立していると考えることができる。利用者が、職人の「手」が「よい」と表現することは、評価している当人の使い方に合わせた「丈夫な」土器をつくる職人に対するものであり、同じ表現であっても、利用者 A にとっては「手」が「よい」職人だが、B にとっては「手」が「よい」職人ではないということがありうる。また、利用者と職人の組み合わせに応じて「丈夫な」土器はたくさん存在しうる。

利用者が特定の職人がつくる土器を好んで購入することは、職人のあいだで多様なつくり方を許容し、土器づくりの独自性を互いに尊重しあうことにつながっていると考えられる。職人は、「手」が「ちがう」という表現で、自分のつくり方の独自性を強調する。D. G. のように、結婚して夫の暮らす村に移住しこれまでとはちがう粘土で土器をつくるという状況の変化に直面したときに、彼女はほかの職人のつくり方を模倣するのではなく、姑や周囲の職人などからアドバイスを受けながら試行錯誤してこれまでのつくり方を変化させていった。職人は、粘土と燃料を手に入れて成形の手順だけを知っていれば土器がつくれて生活できるわけではない。つくり手の社会的な立場や周囲の人びとの関わりなどに支えられて生業としての土器づくりが実現していると考えることができる。

生業としての土器づくりは、その土器を評価して利用する人がいることによって成立している。職人は、季節的な変化、職人自身の世帯内における社会的な立場や経済的な役割、そして農民との社会的な関係や土器づくりに対する評価の仕方などに強く影響をうけながら、絶えず土器づくりを変化させており、それが生業としての土器づくりの大きな特徴のひとつといえることができるだろう。

#### 4.2 生業としての土器づくりの地域間比較へむけて

この論文では、生業としてのアリの土器づくりを、素材と技法の存在だけで成立している技術的な行為としてだけではなく、つくり手がとりむすぶさまざまな関係性に影響をうけて成立している社会的な行為としてとらえてきた。しかし、その特徴は、職人が土器を介して利用者とむすぶ社会的な関係と、職人の手指の動かし方や成形手順などの技術とを同時に対象とし、両者の関係を検討することによってはじめてあきらかになった。ここでは、生業としてのアリの土器づくりの特徴を見いだす際にもちいたこのような対象と手法を、エチオピア西南部さらにはアフリカのさまざまな地域における生業としての土器づくりの特質を検討する際に有効な方法として活用する可能性について述べたい。

比較の単位としての手指の動かし方や成形手順は、気温や湿度、粘土の種類、入手できる燃料の量などの自然条件に拘束されている側面と、つくり手が周囲の人びととの社会的な関わりに対応してつくり方を変化させている側面の両方をあらかず可能性をもっている。手指の動かし方や成形手順の差異や共通性をあきらかにすることは、技法の特質を把握するだけではなく、特定の地域における人と人、人とモノとの関係性とその特質をえがきだす可能性をもっているだろう。

これにくわえて手指の使い方や成形手順は、個々のつくり手の技法を分析する単位としての特徴がある。手指の使い方のパターンや数、また成形の順を比較の要素として抽出することにより地理的分布を示すことができる。これにより、技法の地理的な変異が生じる背景を、個々のつくり手が土器を介して利用者や親族などと社会的な関わりをもちながら土器づくりを変化させ、創造させていく動的なプロセスとして検討することが可能となる。これまで指摘されてきた、特定の技法が局所的に分布していることと人口移動のルートをかさねあわせる技法の伝播説や同一の地域に複数の技法が分布していることと集団間の婚姻関係を関連づける技法の集団間交流説 [Gosselain 2000: 205-206] とは異なる見解を示すことが可能になるだろう。

エチオピア西南部地域には、アリの人びとと同じオモ系の言語系統に分類される人びとが暮らしている。<sup>18)</sup> 彼らのなかには、土器をつくりそれを販売することによって生活を営んでいる女性職人がいる。彼女らの手指の使い方や成形手順をアリの女性職人と比較しながら同様の手法で記述し、社会的行為の比較と重ね合わせることができれば、エチオピア西南部における土器づくりの動的なプロセスや、人と人、人とモノとの関係性とその特質に注目した地域間比



較が可能になる。エチオピア、さらにはアフリカにおいても同様の検討をすすめることにより、さまざまな地域における在来技術の特質やその社会的背景、さらには彼らの生活世界をこれまでとは違った視点から描き出すことができるだろう。

## 謝 辞

本稿は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した学位論文（「文脈化される土器づくりの過程：エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人による地縁技術の習得・実践・創造」2005年1月提出）の第5章をもとに書き直したものです。本稿の元になる調査研究は、平成8年度から平成10年度科学研究費補助金（国際学術研究，課題番号08041059，代表者掛谷誠），1999年度講談社野間アジア・アフリカ奨学金，21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」によって可能になりました。調査，執筆にあたりさまざまな方々にご協力いただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- Bahailu Abebe and Data Dea. 2001. Dawro. In Dena Freeman and Alula Pankhurst eds., *Living on the Edge-Marginalized Minorities of Craft Workers and Hunters in Southern Ethiopia*. Addis Ababa: Addis Ababa University, pp. 108-136.
- Boas, Franz. 1982 (1940). *Race, Language, and Culture*. Chicago: University of Chicago Press.
- Brandt, S. A., A. Spring, C. Hiebsch, J. T. McCabe, T. Endale, D. Mulugeta, W. Gizachew, Y. Gebre, M. Shigeta and T. Shiferaw. 1997. *The "Tree against Hunger" Enset-based Agricultural Systems in Ethiopia*. Washington, D.C.: American Association for the Advancement Science.
- Freeman, Dena and Alula Pankhurst eds. 2001. *Living on the Edge-Marginalized Minorities of Craft Workers and Hunters in Southern Ethiopia*. Addis Ababa: Addis Ababa University.
- Gebre, Yntiso. 1995. *The Ari of Southwestern Ethiopia*. Addis Ababa: Addis Ababa University.
- Gosselain, O. P. 1999. In Pots We Trust: The Processing of Clay and Symbols in Sub-Saharan Africa, *Journal of Material Culture* 4 (2): 205-230.
- \_\_\_\_\_. 2000. Materializing Identities: An African Perspective, *Journal of Archaeological Method and Theory* 7 (3): 187-217.
- Herbert, Eugenia W. 1993. *Gender, Iron, and Society*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press.
- Ingold, Tim. 1997. Eight Themes in the Anthropology of Technology, *Social Analysis* 41 (1): 106-138.
- Livingstone, A. Smith. 2000. Bonfire II: The Return of Pottery Firing Temperatures, *Journal of Archaeological Science* 28: 991-1003.
- 金子守恵. 2004. 「つくりだされる土器の形とサイズ」『JANES ニュースレター』12: 22-24.
- \_\_\_\_\_. 2005a. 「地縁技術としての土器づくりーエチオピア西南部アリ地域における土器の野焼き」

---

18) エチオピア西南部地域では、アリの人びとと同じオモ系の言語系統に分類されるワライタ (Wolaitta), ガモ (Gamo), ゴファ (Gofa), マレ (Maale), バスケット (Basketo), マロ (Malo) などにも土器を専門につくる職能集団がある。彼女らは、マナとよばれる場合が多く、たいてい周辺化された存在である [Freeman and Pankhurst 2001: 137-139].

- 『アフリカ研究』67: 1-18.
- \_\_\_\_\_. 2005b. 『文脈化される土器づくりの過程—エチオピア西南部オモ系農耕民アリの女性職人による地縁技術の習得・実践・創造』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, 博士論文.
- 松園万亀雄. 1975. 「カースト社会における禁忌と清祓—アリ族生活史断片」『社会人類学年報』1: 148-172.
- \_\_\_\_\_. 1979. 「三つのカースト, 南西エチオピア, アリ族の葬送儀礼」『季刊民族学』8: 41-48.
- 森 淳. 1974. 「ウガンダの土器」『アフリカ研究』13: 22-32.
- \_\_\_\_\_. 1987a. 「西カメルーン・バメッシングとその周辺地域における土器製作技法について—成形法を中心に」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋社, 829-847.
- \_\_\_\_\_. 1987b. 「北部トーゴ・モバ族の土器製作技法とその使用法について」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋社, 869-889.
- \_\_\_\_\_. 1987c. 「北部トーゴ・ニャムトウグ周辺の土器について—成形法を中心に」和田正平編『アフリカ 民族学的研究』同朋社, 849-868.
- \_\_\_\_\_. 1990. 「アフリカの工芸」『アフリカ研究』37: 75-88.
- \_\_\_\_\_. 1992. 『アフリカの陶工たち』中央公論社, 234.
- Pankhurst, Alula. 2001. Introduction Dimensions and Conceptions of Marginalisation. In Dena Freeman and Alula Pankhurst eds., *Living on the Edge-Marginalized Minorities of Craft Workers and Hunters in Southern Ethiopia*. Addis Ababa: Addis Ababa University, pp. 1-22.
- 重田真義. 1988. 「ヒト-植物関係の実相—エチオピア西南部オモ系農耕民アリのエンセーテ栽培と利用」『季刊人類学』19 (1): 191-281.
- \_\_\_\_\_. 2004. 「エチオピア高地の定期市—コーヒーの葉とエンセーテを交換する」梅棹忠夫・山本紀夫編『山の現在』岩波書店, 197-206.
- 篠原 徹. 1996. 「土器を作って売る人々—エチオピア南部コンソ社会の事例」『動物考古学』7: 59-82.
- 鈴木郁乃. 2004. 『エチオピア西南部アリ地域におけるこどもの共同労働の変容—学校教育とプロテスタント信仰の影響』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, 博士予備論文.
- 祖父江孝男・大給近達・中村俊亀智・大塚和義. 1976. 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』3 (2): 280-336.
- Wendell, H. Oswalt. 1976. *An Anthropological Analysis of Food-getting Technology*. New York, London, Sydney, and Toronto: John Wiley and Sons, Inc.